

適性検査Ⅰ

意

- 1 問題は **1** だけで、**4** ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は **45** 分で、終わりは **午前九時四十五分** です。

注

- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 解答はすべて解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出** して下さい。
- 5 解答を直すときは、きれいに消してから、新しい解答を書きなさい。
- 6 **受検番号** を解答用紙の決められたらんに記入して下さい。

東京都立小石川中等教育学校

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

文章1

新学期初日は、四月を絵に描いたようなぼかぼかの天気だった。朝から暖かく、私は、新しい登校班の中でゆっくり歩いていた。一年生はもう二日しないと入ってこないけれど、私のすぐ前を歩いていたシンジ兄さんが居ない。いつもシールがべたべた貼られた黒いランドセルを見ながら歩いていたので、新しい班長・容子さんの、つるんとした赤いランドセルがまだ目に馴染まない感じがする。

容子さんに何か話しかけてみようか、でも話題を何にしたらいいだろうかと考えながら歩いてみると、まだシャッターの下りた商店街の端、小さな駐車場に、ランドセル姿の子たちが溜まっているのが見えた。真ん中にシノくんがしゃがんでいる。大きな子から小さい子までいるので、登校班だとわかった。

「どうしたの？」

関わりたくなかったのに、容子さんが声をかけた。向こうの六年生が振り返って言う。

「鳥のヒナが落ちてて……。」

マジで、と言って走り出したのは、私の後ろにいた五年生の男子ふたり組だった。ついていこうとしたら、容子さんに止められた。

(右下へ)

「見ないほうがいいよ、多分。」

何で、と言おうとした時、向こうの輪に入ってしまった五年生たちから声が上がった。

「キモッ！」

「助からないでしょ、これは。」

しゃがみ込んだシノくんがヒナを持っていらっしゃるらしく、ふたりはシノくんの手の中をのぞき込んでいた。

ふいにシノくんが立ち上がる。硬そうな指が、そーっとものを包み込むかたちになっていた。

「え、どうすんの？」

五年生の片方が声をかけた。シノくんは手の中にまっすぐ視線を注いだまま答える。

「連れてく。」

やめなよ、すぐ死ぬよ、という声が上級生から次々に上がったけれども、シノくんは黙って駐車場から出て、通学路を歩き始めた。私たちはその後についていくかたちになってしまった。

校門をくぐる間に、容子さんが振り返って言った。

「知ってる？ 春先に落ちてるヒナってまだ毛が生えてないからすっごい気持ち悪いんだよ。」

突然の言葉に私がきよんとしていると、彼女はもうひと言付け加えた。

「それに、落ちてるヒナはもうだめなんだよ。生きてくだけの力がないってことだもん。」

私は下駄箱の辺りをうろろして、時間をつぶしてから教室に入った。勿論、シノくんと一緒に登校したと思われたくないからだ。

教室に入ると、やっぱり一箇所に人だかりができていた。まだ壁に貼りものがなく、棚という棚ががらんとした教室で、その人だけだけが妙にごちゃごちゃして見えた。窓際の角で、みんなが押し合いへし合い騒いでいる。真ん中にいるシノくんの、モスグリンのトレーナーが時々見え隠れしていた。

「可哀想。」

「怪我してるの？」

「牛乳とかなら飲むかな？ 職員室からもらってこようか？」

シノくんを取り囲んでいる子たちは、誰もさっきの五年生のように「キモい。」などとは言っていないかった。ひよっとしたら、それほど気持ち悪いものでもないんじゃないかと思う。私は鳥のヒナというものを知らなかった。せいぜいヒヨコのようなものしか想像できない。

しかし別に動物が好きな性質でもないから、無視して席についてた。他にも、シノくんの周りにたかっている子ほつほつ居た。間もなく、二つ前の席に茜ちゃんがやってきてランドセルを下ろした。

「何あれ。何で騒いでるの。」

窓際の騒ぎをうかがってから、茜ちゃんがこつちを振り返った。

(右下へ)

私は机の中に新しい教科書を入れながら答える。

「シノくんが、学校に来る途中に鳥のヒナを拾ったんだって。」
茜ちゃんは意外にも「へええ。」と興味のありそうな返事をよこした。

「鳥のヒナってかわいいのかな？」

「六年生の人は、気持ち悪いって言ってたけど。」

私が答えたところで、人だかりとは反対のほうから、また別のざわめきが起こった。

「はい、ちよつと早いけどみんな席について。」

顔を上げると、丸木先生が教室に入ってきたところだった。丸木先生は六年の担任だった先生で、タコみたいな顔をしたおじさんだ。その顔で工藤静香のモノマネ(微妙に似ている)をしたりするので、みんなから人気がある。

「えっ、丸木先生が担任？」

「さあどうでしょう。」

教卓の前の子たちが先生に話しかけている間に、窓際の人だかりはぱつと散っていた。私と茜ちゃんの間の席にも、シノくんがやってきていそいそと椅子を引く。

シノくんは席につく前に、手の中のをぼとりと机の上に置いた。それは、シノくんの席をはさんで向かい合っていた私と茜ちゃんの目に^①あられもなく飛び込んできた。

「ひっ。」

私が息を呑むのと、茜ちゃんが悲鳴を上げるのが重なった。先生をはじめ、教室中の視線が集まるのがわかった。

「ちょっと！ そんなものそこに置かないでよ、気持ち悪い！」
ぎゅっと目をつぶったまま、茜ちゃんがまくしたてた。

机の上に置かれたヒナは、どこに傷があるわけでも血が流れて
いるわけでもなかったけれど、とても直視できなかった。班長が
言った通り、ヒナには毛が生えていない。血管が透けて紅色が
かった皮膚がむき出しになっている。そうして、閉じたまぶたが、
大きな目玉のかたちにそってグロテスクにふくらんでいたのだ。
茜ちゃんが叫んだ言葉は、私の感想とびったり重なっていた。

しかし、我に返ると、茜ちゃんに集まっているみんなの視線が
ひどく冷たいのと、丸木先生がこちらに歩いてきているのに気付
いた。

——あ、怒られる。

そう思ったけれど、丸木先生は茜ちゃんの横を通り過ぎた。シ
ノくんの机の上を見やり、その後で席についたシノくんの顔をじ
っと見た。

「篠目、昌之くん。」

胸の名札を読んだのだらう、丸木先生はシノくんの名前を呼ん
だ。

「来る途中に拾ったのかい。」

先生に訊かれると、シノくんはやけに優等生ぶった口調で「は
い。」と答えた。

先生は二、三度うなずき、その後で今度は、茜ちゃんの顔をの
ぞき込んだ。

(右下へ)

「向坂、茜さん。鳥が嫌いなのか？」

教卓のほうに向き直った茜ちゃんは、黙ってうつむいていた。
返事はなかった。

「……どっちみち、生き物を『そんなもの。』とか言っちゃあな
らん。」

先生は怒り出す気配がない。鷹揚な口調でそう言ったただけだっ
た。

(豊島 ミホ「夜の朝顔」による)

○ことばの説明

① あられもなく —— ふさわしくなく。

② 鷹揚 —— ゆったりしたようす。

文章2

ちよつと油断ゆだんしていると庭中にわじゅうの木や草が繁しげって足の踏み場もなくなってしまう。現代人は植物の繁茂はんもに意外と弱く、気味が悪いなどといって手をふれたがらない。何より植物の湿润性①しつじゆんせいに依存ぞんして生きている百足むかでや蜥蜴とかけ、蟊②ひきのたぐいに身ぶるいを感じるらしい。先日は近くの家の庭の木の枝にしまのある蛇へびが紐ひものように下がっているのを目にしたが、奥さんは野猫のねこにねらわれるといって蛇の方を心配していた。それほど現代の蛇は弱者になってしまったのである。

じつは、私は植物が圧倒あつとう的な力で繁あっている荒々あらかしい荒廃感こうはいが嫌いではない。降ふっていた雨も上がり、大地から熱気が立ち上りはじめると、植物はたちまち何かの思いを遂とげるような激しさで伸のび広がる。現代の文明も、人間の存在そんざいもものかは③④という小さな気味よさをもって。そうした繁あみにまもられて、大きな赤百足や蟊ひきなどが、ひっそりと大地に息づいているのにふと出会ったりするものこのころだ。

そんな時、まるで本当の大地の主に出会った闖入者④ちんにゅうしゃのようになるたえるのはこちらがわで、生まれ出て生きるのに懸命けんめいの相手方は、何といても存在に迫力はかりよくがある。一瞬いっしゆんののち大急ぎで退却たいきやくするのは私の方だから、結局彼らものびのび生きていられるのだらう。

(馬場ばば あき子「野生の美しい目」による)

○ことばの説明

- ① 湿润性しつじゆんせい ———— しめりけのある性質。
- ② 蟊ひき ———— 蟊蛙ひきがえる。
- ③ ものかは ———— 関係ない。
- ④ 闖入者ちんにゅうしゃ ———— とつ然、断りなく入りこむ者。

〔問題1〕

文章1と文章2に共通していることは何ですか。共通していることをまとめて、三十字以上、四十字以内で書きなさい。「や」もそれぞれ字数に数えます。

〔問題2〕

〔問題1〕でまとめたことについて、あなた自身が見聞きしたことや体験したこと例をあげながら、あなたの考えを五百字程度で書きなさい。なお、段落をかえたときの残りのます目は字数として数えます。「や」もそれぞれ字数に数えます。